

64. 大腿骨頸部骨折観血治療における生命的機能的予後の検討

西川晋介, 斉藤康文, 鈴木秀明
(八日市場市民総合)

高齢者の大腿骨頸部骨折の生命的機能的予後を検討した。対象は観血治療した男性22例, 女性44例, 計66例。年齢は55才から94才, 平均78才。術式は人工骨頭置換術, CHS法を第一選択とした。20例31%に歩行機能低下。術後3カ月以内の死亡率7%を認めた。予後不良因子として高齢に伴う内科合併症, 痴呆, 及び手術合併症である術後脱臼, スクリューの骨頭穿孔があげられた。適切な術式選択, 手術手技が重要と考えられた。

65. 大腿骨頭の萎縮を呈した1例

老沼和弘, 小野 豊, 小林康正
(長生)
原田義忠, 大河昭彦, 金 民世
(千大)
伊藤 豊 (伊藤病院)

症例は, 40才男性, 右股関節痛を主訴とし, X線上, 大腿骨頭の萎縮を, MRI上, 骨頭から転子間部にかけての bone marrow edema の所見を呈したことなどより, 一過性大腿骨頭萎縮症と考えられた。画像検査上変化の認められない発症2ヶ月後に施行した骨生検では, H-E染色でも, TRAP染色でも, 骨吸収を示唆する所見は認められなかった。これにより, 本症例での骨吸収は, 発症早期に起きたものと考えられた。

66. 外傷性股関節脱臼のMRI

池之上純男, 原田義忠
飯田 哲, 守屋秀繁 (千大)
藤塚光慶 (松戸市立)
三枝 修 (成田赤十字)
小林健一 (鹿島労災)
田中 正 (君津中央)

中心性脱臼を除く外傷性股関節脱臼42例42関節に対して, MRIを用いて検討した。受傷後早期に TypeA (正常型) を示した19例中17例に経時的変化は認められず, TypeB (び漫型) を示した22例中13例は, 受傷後3~4カ月以内に TypeA に回復し, TypeC (限局型) の band 像は受傷後3カ月以内の早期に出現していた。以上より受傷後3~4カ月のMRIが TypeA であれば, その後大腿骨頭壊死を生じることはないと考えられた。

67. I. M. H. S. (INTRAMEDULLARY HIP SCREW) による大腿骨転子下骨折の治療経験

大鳥精司, 田中 正, 豊根知明
伊嶋正弘, 南 徳彦, 中島秀之
林 隆之 (君津中央)

大腿骨転子下骨折7例(66-88才)に対し, IMHS (Intramedullary Hip Screw, Richards) を用いて治療した。経過観察期間は3-13ヶ月, X線上仮骨架橋は平均7.3週, 骨癒合10.7週であり, 10°以上の内外反・回旋変形(CTによる)は認めなかった。全荷重は平均7.4週であり, 調査時6例が独歩可能であった。CHS自験例8例に比し良好な成績を示し, 内反変形応力に対し leverarm が短い IMHS は転子下骨折の有用な手術法と思われた。

68. 大腿骨頸部外側骨折におけるγ-ネイル手術症例の検討

畠山健次, 土屋恵一, 北崎 等
小泉 渉 (県立佐原)

今回, 我々は大腿骨頸部外側骨折12例に対し, γ-ネイルを使用し良好な結果を得たので報告する。結果は1例に骨頭穿孔を認めたが, 全例に骨癒合が得られた。手術時間, 皮切の長さ, 入院口数, ヘモグロビン低下量につき検討したが, それぞれ平均29.3分, 6.1cm, 34日, 1.9g/dl であり, C. H. S. 手術症例と比較して前三者は有意に短かった。γ-ネイルは手術手技も容易で, 今後C. H. S. にかわる手術法になると考えられる。

69. 髓内釘固定手術中血栓塞栓を生じた1例

渡辺仁司, 梅田 透, 鬼頭正史
徳永 進 (国立がんセンター)
長谷川里砂, 高地哲夫 (同・麻酔科)

48才女性。89年に右乳癌にて手術施行, その後化学療法を受けるも多発性骨転移を認め, 右大腿骨骨転移病的骨折予防目的にて硬膜外麻酔下髓内釘手術施行。術中髓内釘打ち込み時心停止となり蘇生後血圧, 心拍数正常化するも意識回復せず。術中経食道心エコーより右室の拡張, 術後の肺シンチより梗塞像を認めた点から凝固系の亢進が肺塞栓を生じさせ心停止となり, 脳虚血にいたったものと考えられた。